

埼玉育ちのグローバル人



アメリカ南部で日本の種をまく

第1回 11歳・初めてのホームステイ

JOI (Japan Outreach Initiative) プログラム 日米草の根交流コーディネーター

村田 彩さん



埼玉県マスコット「コバトン」

はじめまして。私は現在、「日米草の根交流コーディネーター派遣プログラム」に参加し、アメリカ南部アーカンソー州にて地元の学校、図書館、そして大学にて日本文化の紹介を通し、草の根レベルで日米交流を深める活動を行っています。2016年夏より2年間の任期で赴任しておりますが、外国から見た日本の姿そして私が目指す国際交流活動の形などについて、3回にわたり紹介させて頂きたいと思います。

【初”海外

—小学生でオーストラリアへのホームステイ—

そもそも現在のアメリカでの活動について人に話すと、「積極的な人」というイメージをよく持たれますが、子供時代の私は人一倍人見知りでシャイな女の子でした。埼玉県八潮市で育ち、それまでは海外へ行ったこともなく、もちろん外国人の方との交流も特にありませんでした。しかし、小学6年生の頃に担任の教師より埼玉県主催のホームステイプログラムについて紹介されたことが、その後の私の人生に大きな影響を与えました。

正直、なぜそれほどシャイだった私がオーストラリアに行くことを決断したのかは今でもはっきり覚えていません。しかし、オーストラリアでのホームステイ、外国の小学校、現地の同年代の子どもたちとの交流が、私の今まで知っていた世界の感覚を180度変えることになったのは紛れもない事実です。

家では靴を脱がないことに違和感を覚え、今まで見たこともない大きさのステーキを夕食で頂き、裏庭には野生のコアラやワラビー(カンガルーに似ているが体長は小さい)が当たり前のように暮らしていました。一方で、日本から持参しただるま落とし(伝統的なおもちゃ)でホームステイ先の子どもと遊び、小学校では同年代の子どもたちと一緒に縄跳びをして笑い、夜はホストファミリーとチャップリンの映画を見て泣き笑いをしたのを覚えています。言葉が通じなくても一緒に笑い楽しい時間を共有することが出来ること、そして自分にとっては当たり前の環境を少し離れることで違う世界が広がっているという事実に気付かされました。

【二回目のホームステイ

—ニュージーランド留学—

オーストラリアでの経験を機に、大学時代に海外留学することを目標にしていた私は、立教大学異文化コミュニケーション学部に進学しました。そして、今度は英語力を伸ばすことを目指し渡ったニュージーランドですが、それ以上のことを学ぶことができ、その経験が私の物事に対する考え方を大きく変えるきっかけとなりました。

ニュージーランドは世界中の人々が訪れたいと思う国の一つだと思いますが、私が7か月間過ごしたオークランドは、ニュージーランドで一番大きな都市でありながらすぐそばに美しいビーチや島々があり人々は穏やかな生活を楽しんでいる印象を受けました。



写真 オークランド

語学学校では世界中から集まった学生と共に学び、地元の国立大学に足を伸ばすことでニュージーランド人の友達をつくることも出来ました。日本にいた間はほとんど外国人と関わりがなかったため、このような環境に置かれることで初めて自分のナショナルリティについて意識し、日本について他国の人はどう考えているのかを知るきっかけとなりました。特に韓国人の友人から言われた「韓国の学校で歴史について学び、日本に対していい印象はなかった。でも今は日本人が大好き」という言葉が今も忘れられません。また、国によって時間に対する感覚が日本人と異なり、友人と待ち合わせをして1時間待つこともよくありました。それでも、お互いの国の料理を作りあったり、コロンビア人の友人からサルサダンスを教えてもらったりと、実際に人と人との交流がなければ決して学ぶことが出来ない多くの体験をすることが出来ました。

そして、人の目を気にしすぎない環境で過ごすことで、次第に自分らしさとは何かを考えるようになりました。日本ではなかなか信じ難いですが、ニュージーランドでは雨が降っていても気にせず傘をささなかったり(かなり強めでも!)、裸足で街を歩いている人をよく見かけました。(もちろん全員ではありませんが..) 語学学校の授業でも、日本でしていたように発言することを躊躇して黙っては何も通じません。相手を尊重しながらも、自分の意見をしっかり持ち、発言することの大切さ

を実感しました。少しずつ勇気を振り絞って英語で発言する回数を増やすことで、相手も自分を理解し、より信用してくれるようになりました。



写真 ホストファミリー

【新しい自分、そして新たな挑戦】

帰国後の私は、家族も驚くほど社交的になり、自分の目標に向かいより積極的に行動するようになりました。10代のうちに2度もホームステイを経験することが出来たことに対し、まず一番に家族に感謝すると共に、私は他国・多文化について学ぶことにすっかり魅了されました。

特に、ニュージーランドへの留学では、私が今まで自分の住む世界(日本)にしか注目していなかったことに気付かされました。他の国では今何が起きているのか、それに対し人々はどうのような活動をし、自分はどのように関わることが出来るのかを次第に考えるようになりました。

そこで、立教大学の教授を通し、東京の新大久保にて在日韓国人の方々のお子さん達に英語を教えるボランティア活動をしたり、都内の各大学の学生が主体で行うフェアトレード*の団体に所属し、ラオスのコーヒー農家を訪れ彼らが直面するコーヒー生産や貿易の問題を学びました。また、大学4年生の夏には、新潟県の国際大学(International University of Japan)にてカンボジアやインドネシアなどアジア各国政府から派遣された大学院生達と共に、立教大学と明治大学が主催した10日間に渡り国際協力について学ぶ研修に参加しました。様々な国の事情をその国の人々から直接話を聞き、

実際にその国を訪れたことで、他国と日本の緊密な関わりを学び、また私の人生でかけがえのない友人たちをつくることが出来ました。「常に自分の実経験を通して学びたい」という自身の性格を改めて認識し、これを行動に移すことが出来るようになったのもこの時期からだと思います。これらの大学時代の経験は次回以降詳しくご紹介させて頂きたいと思います。

今振り返ると、当時は自身がアメリカに渡り現在の活動をする事になるとは思ってもいませんでした。しかし、これら一つ一つの経験が、現在私がアメリカで地元の公立学校、図書館そして大学にて日本について紹介するときの活力となっていることに違いはありません。外国や多文化を知りその国の人と実際に話をすることで、今までメディアなどでしか知り得なかった情報が全てではないことに気付きます。また、同じ国の人でも性格や行動様式は様々で、国や文化で一括りに出来ないことも実感します。私は自身の活動を通し、特にアメリカの子どもたちにとってこれら一つ一つの経験が、日本に限らず世界に目を向け、さらにアメリカについて改めて考えるきっかけになることを強く願っています。

第二回目では、上記で述べた大学時代の国際交流活動に加え、都内ホテル勤務にて国内外ゲストとの関わりで学んだことを紹介させて頂きます。

*フェアトレード (Fair Trade: 公平貿易) とは、発展途上国で作られた作物や製品を適正な価格で継続的に取引することによって、生産者の持続的な生活向上を支える仕組み。(「一般社団法人わかちあいプロジェクト」ホームページより抜粋)

(次号へつづく)